

戦前における勤労学生の学びについての一考察

—学習者のライフヒストリーから—

関本 仁

キーワード：講義録、勤労学生、夜学、校外教育、通信教育、学習者、ライフヒストリー

【要 旨】本論文は、戦前における講義録（通信教育）を用いて自学自習を行っていた人々や、進学を希望しつつも願いかなわず就職し、なおも勉学への希望を捨てず、勤労学生として夜間部や各種校外教育活動に参加していった人たちが持っていた「学びに対する考え方」というものが如何なるものであったのかを掘り起こしていくことをテーマとしている。

本論文では、明治期から太平洋戦争前後にかけて展開されたさまざまな講義録、今回は特に明治末期に展開された、幅広い知識を吸収させるべく発刊された『高等国民教育』や、女性向けの講義録である『高等女学講義』に焦点を当てていく。総体的に見れば未だ中等教育段階の正規課程への進学は充分ではなく、ましてや高等教育を受ける機会が不足していた女性の学びにおいて、学習者である女性たちはどのような意識をもって講義録に取り組んでいたのか。その際には実際に当時講義録で学んでいた女性へのインタビューを手がかりにして考察を行うこととする。

今回のインタビュー等の調査により改めて早稲田大学講義録の普及の大きさについて確認をすることができた。

また、多くの学習者たちに共通するのは他の学習者との繋がり、というものを特に重視していたといえるだろう。特に講義録という学習形態をとっている場合、「独学」なのだから当然ではあるが、とにかく一人一人個人の作業となることが多くなる。やはり一人きりでの学習というのは大変心細いことになるのだろう。これで正しいのか、など周囲の者から確認をとることができないために不安に駆られることも想像に難くない。孤独のうちに学習しているのは自分だけではないのだと再確認できるという意味でも、盛んに読者欄などでの互いの意見のやりとりなどが行われていたのではないか。それは、インタビューをさせていただいたお二方についても、共通する要素があると推測される。

はじめに

筆者は、戦前における講義録（通信教育）を用いて自学自習を行っていた人々や、進学を希望しつつも願いかなわず就職し、なおも勉学への希望を捨てず、勤労学生として夜間部や各種校外教育活動に参加していった人たちが持っていた「学びに対する考え方」というものが如何なるものであったのかを掘り起こしていく、ということを大きなテーマとしている。つまり多くの、特に経済的なハンディキャップを抱えた学習者たちがどのようにして学を志し、どのように学び、どのように自らが学んだ事柄をその後の彼らの人生に生かしていったのか、ということについて調査研究を進めている。

本論文では、明治期から太平洋戦争前後にかけて展開されたさまざまな講義録のうちから、今回は特に明治末期に幅広い知識を吸収させるべく発刊された『高等国民教育』や、女性向けの講義録である『高等女学講義』に焦点を当てていく。総体的に見れば未だ中等教育段階の正規課程への進学は充分ではなく、ましてや高等教育を受ける機会が不足していた女性の学びにおいて、学習者である女性たちはどのような意識をもって講義録に取り組んでいたのか。その際には実際に当時講義録で学んでいた女性へのインタビューを手がかりにして考察を行うこととする。

本論文の先行研究としては、早稲田大学 大学史編集所編『早稲田大学百年史』をはじめとして、天野郁夫や竹内洋の論考の他、菅原亮芳編『受験・進学・学校 ―近代日本教育雑誌にみる情報の研究―』（学文社、2008年。）においては、講義録を用いて学習していた人たちについて、その学習の様子を含めて触れられている。だがこれらは「受験・進学」に焦点が絞られており、彼女らの「学び」という行為に対する思いや立場についてうかがい知るには不十分であると思われる。また、戦前における女子教育の思想的背景については、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991年。）が示唆的であるが、そもそも学校へ通学することがかなわなかったような、講義録に学ぶ女性たちについて多くの言及がなされているわけではない。

今回の調査・分析をおこなう際に用いる講義録は、1908（明治41）年より刊行された早稲田大学出版部の『高等国民教育』や大正期より刊行された『早稲田高等女学講義』などである。また、受講者の声が寄せられた雑誌、たとえば、『早稲田高等女学講義』の副読本である『女学の友』や、さまざまな受験雑誌・教育雑誌などの資料を用いて、彼女たち学習者を講義録へと向かわせた要因がどのようなものであったか、講義録で学んだことをその後の人生にどのように生かすことが出来たのかについて分析をおこなう。各時代における当時の思想・言説と講義録の受講者である女性たちの意識や行動との連関について、制度的問題についても注意しつつ分析・考察をおこなう。その際には、実際に当時講義録で学んでいた女性へのインタビューなどを手がかりにして考察を深めたい。

1. 明治期より始まる校外教育活動の位置づけ

東京専門学校自身が組織的に講義録による「校外生」制度を発足させる以前、埼玉県北葛飾郡宝珠花村（現春日部市庄和地区）の横田敬太という人物が、東京専門学校（現早稲田大学）設立に関わり、学校運営の中心的存在であった高田早苗と地方講演で知り合い、高田の協力を得ることによって1886（明治19）年発足させた『政学講義会』¹があった。これは高田が「学校の同僚とも相談の上、学校の名を貸して其人（横田：引用者注）の勝手に経営させる事にし、『政学講義』と『法学講義』を先づ始めさせた」²ことによる。これについて高田は「日本で校外生を募つて講義録を発行すると云ふことは、此前の講習会の席に於ても陳べた通りに先づ此早稲田大学が初めてある。もう少し適切に云へば寧ろ私一己の工風に出的ものである」³としており、「これは我日本に於ては早稲田大学で初めて考へだしたことであつて、二十年前に此事を思付きまして今日まで継続して此筆の上の大学教育の普及と云ふことは終始努めて居り、そして其が益々発達をして居る訳である」⁴と後に回想をしている。ただし、これより以前から、たとえば1885（明治18）年に英吉利法律学校がその開校当初において講義録発行を開始させており、1887（明治20）年1

月から専修学校が法律学および経済学の講義筆記の発行を行っている。さらに同年9月には明治法律学校が講法会から講義録を発行、これは後に校外生制度として発展し、法学科と商学科の2科を置いている。横田敬太の事業失敗により、活動停止となった政学講義会は高田早苗、東京専門学校幹事・田原栄により「東京専門学校出版局」と組織再編され、講義録発行の事業を継続させていく。それまでの横田による個人経営としての政学講義会から、田原を発行人、横田を印刷人とする東京専門学校出版局の事業として吸収されるというように講義録はその体裁を変化させていった。1891（明治24）年2月に東京専門学校が全面的に直接経営に乗り出すまでの3年余りの期間は、実質的には東京専門学校自身の運営に属する状態ではあったが、形式的には学外の出版機関である「東京専門学校出版局」の経営に属していた。「政学講義会」経営時からの横田の負債が出版局の財政を圧迫していたようである。しかし、講義録出版に対する熱意から出版の存続を試みようとした結果、学校直営という形態を採ったのである。

東京専門学校が学校直営として講義録を発行することになるのは1887（明治20）年10月の事であるため、上記の3校は東京専門学校より先んじて講義録を発行し始めたことになる。講義録発行開始初年においては『政学部講義』、『法学部講義』と題された二つの講義録があり、各々60ページ、一部につき八銭としていた⁵。これらはそれぞれ東京専門学校の配当表から、代数学、体操、卒業論文の三科目を省いたものとはほぼ等しく、担当教員も同一であった。翌年には『行政科講義』が加わり、1895（明治28）年には『文学科講義』の刊行が開始された。なお、哲学館は1888（明治21）年から『哲学館講義録』を発行開始し、哲学館通学者を「館内生」、講義録購読者を「館外生」⁶として通信教育の制度を整備拡充している一方、和仏法律学校では1890（明治23）年1月から校外生制度を行っている。また、東京大学は明治10年代では自然発生的な演説活動がみられるなか、1887（明治20）年2月から、理、医、法、文、工の五分科大学の、帝国大学教授有志による大学通俗講談会が設立されている。慶應義塾では1908（明治41）年から夏期休暇を利用して地方巡回講演を開始している。このように、東京大学や慶應義塾などでは「講義録」という形態を用いない大学開放の方法を展開していた。

1891（明治24）年6月の教育時論223号によれば、「今日私立の学校にては、各講師が日々講義する所を筆記し、講義録として出版し、これを校外生に販売し、法律、政治、歴史、教育等の諸学科を学ばしむ。此事たる学校に入ること能はざるもの、為には、甚だ便利なる法にして学問を普及するの利あるべし。」⁷とあり、東京専門学校に限らずこの時点で多くの私立学校が講義録の刊行を行っていたことがわかる。しかし、それと同時に、「若し学校にて毎日の講義を筆記して、之を出版発売したらんには、人情の常として誰か自ら苦んで講師の講義を聞き、且つ自ら之が筆記の労を取らんとするものあらんや。是に於いてか、懶惰なる学生の如きは、下宿屋の二階に籠城して、空しく貴重の日子を費やすもの比々として之あるに至る、是講義録に依頼するの弊なり。是本と学生の罪なれども、学校に在ても亦深く注意せざるべからざるなり。吾等は学校より講義録を出版するは、学生の為却て害の大なるを信ずるものなれば、これを廃止せんことを望むものなり。」⁸とも指摘されている。これは当時、講義録の受講者である「校外生」だけでなく、実際に学校に通学している学生、つまり「校内生」達が講義録で勉強をして学校に行かなくなってしまうという現象が起きてしまったことからこのような弊害が起るのならば、講義録を廃止して

しまふべきだ、との論を張るものが現れたことを示している。些か極端な論調ではあるかもしれないが、少なくともこの文章を寄せた人物にとっては、あくまで「校内生」にとっての悪しき弊を除去するには、結果として講義録受講者の学習の場を削ってもよいと考えていたのであろう。その意味で講義録受講者の立場を低く見る人達が居たことがわかる。

2. 学習者：読者の様子 ―主として雑誌の投稿欄から―

ここでは、いくつかの雑誌や、講義録「内容見本」に掲載された学習を行う人々の投稿記事から、彼らの学習に対する意識などをひろいあげ、彼らの学習に対する意識について分析を試みたい。

1) 『高等国民教育』の「読者倶楽部」から

まず、ここでは、明治末期に発刊された早稲田大学講義録のうち、中等教育レベルから始まり、中等教育レベルの内容にとどまることなく、幅広い知識が身につけられるよう目指していたと思われる『高等国民教育』内に掲載された「読者倶楽部」から、受講者たち、特にこの講義録が発行された時点では女性の学習者に注目されていなかったために男性の学習者たちの投稿記事となっているが、彼らの声を取り上げ、その学習の様子などを分析してみたい。

読者諸君、僕は小学校の准教員である。准教員だからとてさう一概に価値を下げられては困る。幸ひに僕は本誌によつて新時代の模範的国民を以て自ら任じ、時世にうとい仲間の者にいつも立憲国民の如何なる覚悟を持すべきものか又文学趣味の何ものたるかを語つて、以てひとり誇りとして居る。だから今では同輩のサラリーが上がつたなぞといふやうなケチな問題には、決して心をとめぬ様になった。(山梨-哲坊)⁹

すでに教員として職に就きつつも、更なる知識を得ようとしてこの講義録を手にとったのであろうことが窺われる。講義録を受講することで専門学校入学資格等が得られる等の特典が存在したわけではない。ただ教養・知識を得んがために学ぶ、というのは現在においては一般的となったような「生涯教育・生涯学習」といった考えを持ったといつても決して過言ではないといえるスタンスで学んでいるように思われる。

草廬を出づれば即ち病むの悲運に遭遇すること、前後すでに五回。雄飛発展すべく資力と体質と修養との不足を悟れるや久し。而も尚ほ野心と遊心と勃々禁じ能はざるもの旧来依然たり、我何の故なるを知らず。今春本講義録を購読すべく禁煙を断行せし時も病臥中なりき。爾来なほ快癒に至らざるに枕頭既に六巻を飾る、不堪感謝。(越後-溪愛生)¹⁰

「資力と体質と修養との不足」と述べていることから、経済的な事情等もさることながら、病弱な体を押してなお学習に取り組もうとする姿を見いだすことができるだろう。経済的な事由のみならず多様な背景から講義録で学んでいたことがうかがい知れる。

降り続く霖雨に身も心もめいらんとする三日の朝、奮つて六時半に起床して朝餉をすまし、官署へ赴かんとする折しも、お馴染の郵便配達夫は来たりて、待ちに待たれし「高等国民教育」はわが手に落ちた。登署後僅かの時間を得て巻頭より一瀉千里の勢を以て走り、早くも一番なつかしい雑録へきた。今度こそは読者諸君の感想通信等の文章に接することゝ思つたものを、竟に終に見るを得なかつた。何故諸君は遠慮をするだらう、折角貴重なる紙面を割いて、諸君の投稿を歓迎すると言ふのでは無いか。(東北—紫水生)¹¹

ここでもやはり働きながら学びつつある様子がみてとれるが、ここで注目したいのは一気に巻末まで読み切る集中力もさることながら、巻末の読者欄である「読者倶楽部」に一層注目をしていることである。基本的に講義録で学ぶ人たちは個人個人で独学していくものである。地方ごとに集まって学習者のコミュニティが形成されていたようだが、常にその中で学んでいくわけではない。そしてどこかで独学をしているもの同士、精神的な繋がりを持ち、満足な状況下で学習することが叶わないのは自分だけではないのだ、と思うのは必然ではないだろうか。この投書を見ると、この文章が書かれた時点では決して満足な反響が届いていないようではあるが、同じような境遇の人たちが多くいたことを考えれば、この意見に共鳴する人物が存在していたであろうことは想像に難くない。

山形県校外生諸氏に告ぐ、本講義に依つて得たる知識を益發揮して、賢明なる諸兄と共に早稲田の学風を我同輩に知らしめ、どこまでも高等国民としての転職を普及せしむる趣意にて、山形県人を以て一の会を設立し、早稲田を本部として新年早々活動したし。熱心なる諸兄賛同の上、生宛に御一報を乞ふ。(山形県糠野目、竹田心洋)¹²

こちらは実際に山形県内に同じ講義録を用いて学習する人たちで繋がりを持つべく会を立ち上げて参加を促している。

自今の如く校外生諸君と本欄に於て友誼を交換しつゝ在るの日は、此上雑誌発行の必要もないけれども、一度講義終了の暁、再び諸君と相見る事の出来ないのは甚だ遺憾に思うから、機関誌の発刊により永久に講師諸先生の訓示に加ふるに、相変わらず誌友諸君の親密なる交誼を継続したいといふのが我が輩の主意である。(加藤麗泉)¹³

ここにおいては、仮に一旦講義録での学習を終えることになったとしても、同じ学舎で学んだもの同士のように、またそれだけにとどまらず講義録を執筆している講師たちとの繋がりを保ち続けたいということが綴られている、仲間意識、という思いも当然あるだろうけれども、「永久に講師諸先生の訓示に加ふる」などと書かれていることからしても、おそらくここにもずっと学び続けたいという想いが込められているのではないだろうか。

2)『早稲田高等女学講義』『内容見本』から

次に『早稲田高等女学講義』受講者の勉学に励む様子について、世間一般に広くその発行を周知するのに寄与したと思われる「内容見本」から、それまでに講義録で学習した人たちがカリキュラムを一通り学んだ上での感想、学習時の様子などを触れた文章をいくつかひろいあげ、受講者の意識を含めた分析を試みたい。

次に引用する文章は、労働にいそしみながらも専門学校入学者検定試験、いわゆる「専検」を突破すべく勉学に励む様子について述べられた文章である。

専検に合格した人々

工場生活の傍ら

昭和三年の新春、楽しい学び舎の生活は八ヶ年優等の榮譽の中に暮れましたが、私の心は暗い憂ひで満たされてゐました。看護婦志望も空しく、やがて村の習ひのまゝに工場へ通ふ身となつたのでした。嗚呼、其頃の心持を思出すと未だ悲しみの涙が禁じ得ません。希望も憧憬も楽しみも無く悄然と働く私の姿に心を痛めた母は、当時医大在学にて帰省して居つた従兄のすゝめに従ひ、早稲田高等女学講義の仲間に入れてくれました。それから一ヶ年、たゞ現在の境遇から逃れたい一念で学びつゞけました。明けて昭和四年早女講も終わりに近づく頃、卒業試験に応じて見ましたら合格しましたので躍り上つて喜びました。続いて尋准の試験を受けて合格し、今また専検に合格することの出来ましたのはひとへに講義録のおかげだと感謝してゐる次第であります¹⁴。

希望の職種に就くことができずにいたなかで、医療に関わる親類のアドバイスもあって、勉強に打ち込んだ様子が見てとれる。「現在の境遇から逃れたい一念」で学んだというのは、学習に対する意識としては、必ずしも前向きとは言えない姿勢ではあるかもしれないが、それでもなお学習に対する確かな原動力にはなつたのであろう。その先へはどのようなことを見据えていたのか、この文章からうかがい知ることはできないけれども、それが「尋准の試験を受けて合格し、今また専検に合格する」、つまり准看護婦（当時）の試験を突破し、専門学校入学資格を得ることに繋がったのだと推察する。

病院に勤めつゝ

未熟なる私が昨秋朝鮮総督府にて施行されました専検に合格することの出来ましたことは早稲田の諸先生を始め女学の友にてお励まし下さいました先輩の方々の賜と感謝しております。顧みれば昭和二年受媛唄の産婆看護婦養成所へ入所致しまして、翌年卒業と共に同県にて施行されました看護婦及び産婆試験に合格致しまして、同九年朝鮮の道立医院に看護婦として採用されました。社会に立つて行く上に自分の無学を恥ぢ、どうにかして勉強したいと思ひまして、翌年一月早稲田の高等女学講義第十四回生となり、毎月雑誌に掲載された受験奮闘記に励まされ、専検を受けてみようと思ひました。

受験の度に受験者の殆んどすべてが早稲田の郊外生であることを知りまして非常に力強く感

じました¹⁵。

一方でこちらは看護職に従事しつつ講義録を学ぶ姿が窺える。講義録による学習に取りかかった当初から専検の受験を見据えていたのかどうかはここからは分からないが、文章の通りの意識であったならば、初めは「無学を恥ぢ、どうにかして勉強したい」ということから幅広い知識を身につけようとしたことが見えてくる。「受験の度に受験者の殆んどすべてが早稲田の校外生であること」というのはどのようにしてそれを知ることができたのかが不明瞭であるため、誇張である可能性が拭えないように思われるが、それでもやはり多くの受講生が同じ専検の受験者のなかに存在していたのかもしれない。

次に引用する文章は日々の学習の様子的一端が示されている例である。

仕事をしながら

無能な私が専検受験の希望を抱くなんて全く空想のやうなものでしたが「なせばなる、なさねばならぬ」とかいふ事もありますので一意専心黙々と努力を続けて参りました。今度僥倖にも専検合格にのぞみまして、たゞたゞ感慨無量です。過ぎし日の努力を思ひ出せば、涙の日もございました。講義録こそ私の恩人です。

勉強法など申すほどの事ありませんが、「読書百遍意自ら通ず」とかいふ主義をとりました。終日書物を読んでゐる訳にはいかない私は、仕事をしながら頭の中にその日に得た知識を復習するやうにいたしました。又重要な箇所などは小型なノートに記入したりして記憶力を養いました。

思ひ出せば四年前、小学校を卒業して間もなく燃ゆるやうな勉強心を以て早稲田の校外生となつたのでした¹⁶。

この文章から非常に自己を卑下しつつも着実に、そしてこまめに学習をしているといった様子が見えてくる。残念ながら「燃ゆるやうな勉強心」の源泉となったことがどのようなものであったのかはここからは分からないけれども、その几帳面な学習から、学習に対する誠実さが見えてくるように思われる。

3) 『女学の友』から

また『早稲田高等女学講義』の副読本的な存在として発行されていた『女学の友』より、先に挙げた『高等国民教育』の「読者倶楽部」と同種である「談話倶楽部」という、学習者たちの個人の主張・感想や各地に散らばる学習者たちとのつながり・連帯を意図した投稿などのなかからいくつかをひろいあげ、分析を試みたい。

十回生として皆様方のお仲間入りをさせて戴きましてより八ヶ月の長い月日は経ちました。やさしい父に死に別れ悲嘆の暗路を行きつ戻りつして居りました時、はからずも神は早女講校外生へと妾を運んで下さいました。燃ゆるが如き向学心も工場生活をする子なるが故にか

ねへられぬと嘆きて居りましたが、妾の前途は光明に輝いて居ります。御熱心なる諸先生の御教へとやさしいお姉様方のお導きとによつて将来の希望を達成せんと誓つて止みません。気の弱い子はお姉様達の御奮闘の言葉によつて心強く思ひます、今後一層の御励と御健康を祈ります、みすこやかに 京都府¹⁷。

この文面をみると、父親を喪つたことで経済的な事由から進学を諦めて就職することになったなかで、講義録という学習の場を見出したことにより、大きな希望を抱いていることが分かる。4月から開講し、7月号に掲載された投書ということで、こちらは専検の試験をまだ受ける段階ではないし、専検の受験を見据えているかどうかは分からない。けれども、「気の弱い子はお姉様達の御奮闘の言葉によつて心強く思ひます」という言葉から見てとれるように、学習をしているのは自分だけではないんだ、ということをも自分自身にも言い聞かせているように思えるし、そういう不安感を抱きつつ、独学という孤独な行為を紛らわせるのには先の言葉は学習者それぞれに大きく響く言葉なのだろうと思われる。

私はこの講義に入学してから早や三年になります。入学の当時は専検をもと思ふ程の意気込みで居りましたが、震災の時に一度に溜まつたため読みこなせなくなつてしまいました。其後昨年五月に家庭に入り、多忙のために、手を付けることが出来ませんでした。家は呉服商ですが、然し以前の失敗を思ふて今度は是非思ひ立つた事を仕遂げたいと堅く心に誓つて居るので御座います。何卒先生のご指導を御願ひいたします¹⁸。

この4年前、1923年の関東大震災という非常に大きな災害があったなかで、その影響で日々の生活に追われるままに学習が疎かになってしまったというのは素直かつ率直な報告であるといえるだろう。実際、課された課題をこなすことができないままに学習を止めてしまったであろう人たちも相当数に上るであろうことは想像に難くない。それでもなお、学習に再チャレンジすることに対しては、誰彼に気兼ねなく自分自身の気持ちで取り組めるという意味で講義録というのは間口の広い存在といえるのではないだろうか。

4)『早稲田』から

そしてこの節の最後事例として、早稲田大学各講義録の副読本的な存在として発行されていた『早稲田』という雑誌から、講義録で学ぶ人たちの一日の様子が比較的詳細に示されているものを二つほど拾い上げ、彼らのようにについて分析を試みたい。

独学のくらしみ

女学二一回 Y・A

当年私は二十歳でございます。生れは山梨の或る片田舎に育つた乙女です。尋常小学卒業して町の実科女学校に通つてゐましたが家庭の事情で卒業し得ず現在は工場生活に這入つてゐます。

或る日Y様（会社員）から早女講がある事を教へて頂いて、早速第二十一回生としてお仲間入りさせて頂いたのです。女学校で学べなかつた私にとっては、最も信頼すべき師でありまた又良き友でせう。私は講義のくるのを千秋の思ひでお待ちしてゐました。四月四日。あゝ、私にとっては本当に嬉しかつた日です。講義を手にした時こそ私はうれしすぎて何も云ふ事は出来ませんでした。此の時の喜びは今誌上にはとても書き表はせません。

私は一時も本をはなさず時間のある限り勉強してゐます。けれど悲しい事には私は時間務めです。朝八時より夕六時迄。九時の消灯です。

私には到底此の講義を十分に勉強する事は出来ません。時間割通り学ぶ事が出来ない時もあります。勉強する時間が恵まれてゐぬ私は何処へ行くにも講義を友として一緒に行きます。そして暇さへあれば読書致してゐます。早講義生の皆様には私の様な境遇な方もおありでせうか。そして私の様に勉強する時間が恵れてゐ無い人もありますか、もしおありでしたらどんな方法でお勉強なすつていらつしやるかお教へ下さいませ。

科目では私は小さい時から修養国語地理算術が一番好きでした。其の他の科目にも一心に勉強してゐます。英語は好きですけれども私には本当に六ツかしく感じます。皆様は講義録だけで学んでゐますか、私には実に困難に思はれます。皆様いかゞ御勉強なすつていらつしやるかお知らせ下さいませ。愚かなる私も尚一生懸命に学びますからどうぞ御指導願ひます¹⁹。

懸賞応募ということで、模範的な文章が採用されやすかつたであろうとは思われるが、この文章を見ると必ずしもそういうわけでもないということが分かる。それは、ノルマをこなさきれないときがあるということ、そしてこの教材だけでは難しい、という意味で述べているのだが、講義録の学習だけですべて事足りるようには思っていないことが窺える。

私の勉強法

女学第十七回 S・S

拙い私が勉強法と云へば余りにおこがましゆうは御座いますけれどもこの拙い勉強法でも誌友諸兄姉の御参考になるならば幸甚の至りで御座います。

私は現在知人の二階を借りて自炊生活をし乍ら某事務所へタイピスト兼事務員として勤務致して居ります。勤務時間は朝九時から午後四時迄、然し忙しくて五時、六時になる事も屢々御座います。尚私の努めてゐる事務所は個人の経営であり、一步事務所へ入るや四時迄は到底本を見ることは許されません。たとへ暇の時でも自分の事をしては所長の御機嫌が悪いのです。為に事務所では本を見る事は諦めて居ります。そこで勉強時間と云へば夜の二時間及朝の三時間それから通勤の途上、それだけなのです。次に日課表を示せば

午前四時起床

四時三〇分自——五時三〇分至 数学

五時三〇分自——六時三〇分至 国語

六時三〇分自——七時三〇分至 理科

七時三〇分自——八時至 朝食及雑用

八時より出勤九時迄途中家事を調べる
九時自——午後四時迄 事務所
四時自——五時迄 帰宅
五時自——七時迄 炊事、食事及び雑用
七時自——八時迄 地理
八時自——九時迄 歴史

九時半 就寝

時として事情の為に変更する事がありますが出来る限り実行して居ります。勉強にかゝる時の用意としては、なるべく種々の仕事をかたづけて心残のない様気を落付ける事、朝は起床後家庭体操、夜は五分間瞑目致します。部屋は一つだけなので寝室にも食堂にも勉強室にもなり甚だ不便ではありますが私の現在の境遇として致方なく窓際の明るい所へ机を置いて勉強します。各科の勉強法としては総て精読主義、然し数学は一問々々確実に解ける迄する事、地理は略図を書き地勢都邑産物鉄道記事、国語の漢字はタイプの暇な時文字盤で覚える。其他必要の箇所へ赤線を引く事、今の所少しづつでも確実に進む事をモットーとしてゐる為め頁数は余り進まないやうです。(後略)²⁰

こちらは非常に詳細に一日のスケジュールが記されている。あまりに几帳面であるがゆえに、実行できていたのか疑問を持つ面もあるかもしれない。しかし、仕事をしながら学ぶということ自体、決して気楽に取り組めることではなかっただろうし、実直に学習に取り組んでいた人というのはそれだけの覚悟を持った上で勉学に励んだのであろうことも想像に難くない。

通常、4年ないし5年で卒業する「通学課程」の高等女学校の生徒にたいして、1年半、一時期においては1年間で課程を修了していた『早稲田高等女学講義』の受講者との違いはあまりにも大きいものであったことはこの体験記を見ても明らかである。この文章は懸賞応募ということで、示されたものは模範的な行動となる傾向があるにせよ、講義録を終えただけでは卒業資格が得られない状況の中で、「専検」という困難な目標に向かって人々の学習に対する熱意は並々ならぬ事は見えてとることができる。

3. 学習に対する意識について —インタビューを通して—

ここでは、学習の様子についてのインタビューをもとに、各人のライフヒストリーを分析し、その意識やその後の生活での影響などについて考察を試みたい。

1) 講義録を通した女性の学び

今回、講義録を受講していた女性のインタビューを通して、その人の置かれていた背景、学んでいた当時の様子、そして講義録を学んでいたことによって得た人との繋がりなどについて分析していきたい。なお、このインタビューは些か時代を経たものであり、インタビューを受けてくださった女性はこのインタビューの1年後に他界しており、追加の調査が事実上不可能であること、このインタビュアーは筆者ではなく、ご厚意によりお譲りいただいた録音データであること

を付記しておく。

I：インタビュアー、T：愛媛県在住、女性（故人）。

2007年10月13日愛媛県にて収録。

I：おおうちのおじさんとこいて？女学校出てからいたんじゃろ？

T：うん、学校へ1年遅くでね、辛抱して行動したんだ

I：ほうかね、それで？

T：それから1年たってから学校やらないかんゆうてね

I：ほう、それならばじめは仕事しにいったんじゃの、小僧みたいに。そんなら学校いかな、いうて行かしてくれたん。

T：うん。

I：うん、ほうならばあちゃんだけは女学校出てから就職したわけじゃの？おじさんここに。

T：うん。

I：なんて出ていったん。仕事するいうて出て行ったん？なんていうて出て行ったん？修行かね？

T：うーん、就職したんや。

I：就職したんじゃの。それから学校出してやるゆうて学校行ったんやろ？

T：一年就職して学校行った。

女学校、つまり高等女学校を卒業した後に仕事をしながら学ぶ、という生活を送っていたようである。ただ、就職と進学は同時ではなく、先に就職をしてから学校に通うようになったようである。

T：それから朝4時から起きた。

I：それは修行の話しかね？

T：うん、仕事の時、…4時に起きてね、小僧と一緒に。

I：どないなことしよった？

T：昼も夜も…小僧の仕事した。

I：どんなこと？

T：昔はね、小僧の仕事は、職人の仕事を私と誰かで手伝った。

I：それから1年で学校行った。どんなことしたん？どんな学校いったん？

T：学校はもう、そこらの小僧は皆行くけんね。先に。

I：あー働きよる人はみんな学校行くいうたん？

T：うん。

I：同じとこいくん？みんなで。

T：うん。

I：みんな働きながら学校いくわけか。なるほど。ほいで？どないな事勉強するん？

T：いやー、洋裁だったら洋裁、和裁だったら和裁。

I：で、ばあちゃんはなにをしたん？

T：ばあちゃんは洋裁。

I：ふーん、そいで？

T：昼から洋裁の授業。

I：なら朝4時に起きて、仕事して、…

T：うん。

I：ならしんどいね。で、何年ぐらいたったん。

T：1年。

I：学校も1年やったん。

T：うん。それがもう1年ね。

I：学校の名前覚えてるん？

T：覚えてないね。

I：じゃあばあちゃん2年尾道いっとったんじゃの？修行1年して、で学校1年いたんじゃの修行して。

T：ううん、もっといたよ。学校。

I：学校何年くらいいったん。2年とか3年とか、いたの。

T：ん？2年…

I：2年いたん？

T：2年いたね。

I：なら3年くらい働いてそのうちの2年は学校行って働いてた？

T：うん。

仕事が朝4時から始まるという状態で、なおかつ昼過ぎから学校へと通うというような負担の大きな生活であったことが窺われる。しかもその生活を2年続けていたということである。ここで語られている「学校」というのがどのような設置形態のものであったのかは不明であるが、これは講義録などのような通信教育とはまた違った形の、和裁や洋裁をあつかった学校であったようである。

I：ばあちゃん、講義録はどないして手に入れよったん？

T：講義録いうのはね…あの…手に入れたいうのは…あの…

I：なんか、送ってくるんだい？通信販売みたいなん？

T：通信販売で取り寄せた。

I：早稲田のやつ？

T：早稲田のだった。

I：早稲田のとりよったん。何で早稲田のとりよったん？

T：早稲田の方が一番とりやすかった。

I：なんで？

T：数があったから。

I：ああ、ほうかね。ほういうのもあった。で、中が面白かったというのはないんで？

T：なかよか面白うない。

I：ははは。ばあちゃんのはようけ何か専門とかじゃなしにようけいろんなものがのつとるやつ？どないなののがのつとった？

T：早稲田のその…そんな…いつもびらびら…のつとった。

I：早稲田なに？何がいつものつとった？

T：そういうようなかうんとだけや。

I：ああ、いろんなものがのつとった。わいわいと。

T：うん。

I：早稲田のとりよるんは何でとりよかったん？新聞屋によび広告出とったりするんかね？
広告みて？

T：うん。

早稲田の講義録について、これを受講した理由として入手のしやすさを挙げている。発行元の東京から離れた地域である四国地方においても、入手が容易であったという証言は注目に値する。何故なら、こうした講義録は、そもそも正規の通学課程で学ぶことができない多くの人々に向けた教育媒体であり、それだけ身近な存在となっていたといえるからである。ただ、内容については決して面白い、とは受け止めてはいなかったようである。

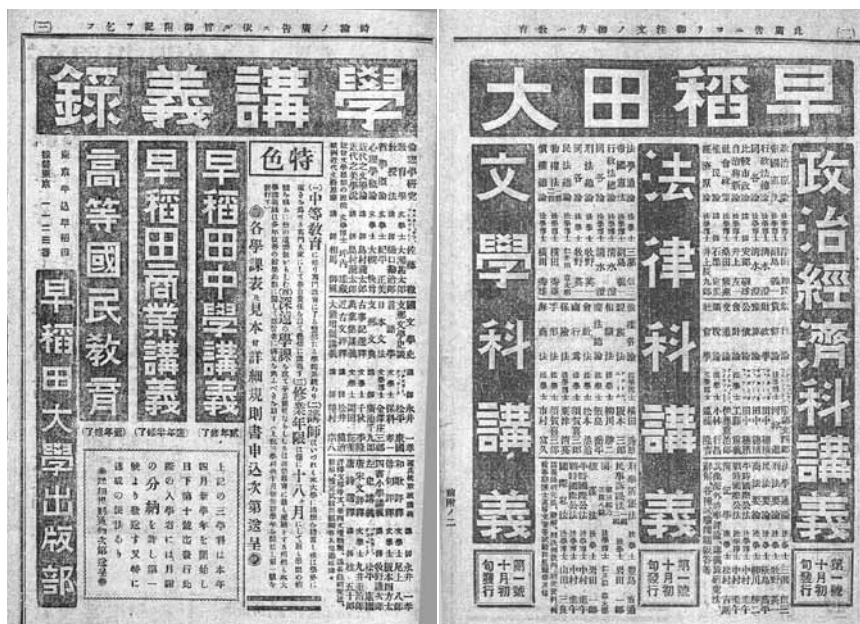


図1 『早稲田大学講義録』広告 出典：『教育時論』917号 1910年。

- I：ばあちゃんは読んだりしよったん？ちゃんと、なか。とったらとったけど。
- T：とったら…よまなくてまいね。
- I：読みよった。
- T：うん。
- I：で、なんか送ったりしよったん？おくりかえしたり。
- T：うん。
- I：おくりかえしたりしよったん？
- T：うん。
- I：なんか問題解いて送り返したりするんだろ、あれ。ああ、じゃあしよったん。で、どれくらいとったん、ばあちゃん。
- T：何年もとったね。
- I：何年もとったんかね。何でまた始めとろうか思うたん？
- T：勉強したいけん。
- I：ああ、勉強したいけんかね。何でまた勉強したい思うたん？
- T：そういうもたがいうかて、学歴がほしかったし。
- I：はあはあ。早稲田の通信講座で？やったらええけん？で、何で学歴が欲しかったん？
- T：それはもう、どないいうたて…専門の学歴もったかな…

受講しているなかで、面白いとは思ってはいなくても講義録を用いて何年も学習することができた、というのはやはり努力の賜なのだろう。決して簡単になせるものではないはずである。その原動力になっていたのは、やはり専門学校に進む、つまり専門学校に進むことを見据えた上での学習、ということになっていたようである。これは、前節において確認してきた受講者の投稿記事などとも一致することである。

- T：趣味は、あの…いつも勉強しよる人だったね。
- I：ずっと勉強しとったん。どなんことしよん。勉強ってて。書類書いたりしよったん？
- T：書類…
- I：本読みよったん？
- T：本読んだり…したりしたねえ。
- I：うん。
- T：そうやねえ。朝から晩まで、本読む人だったねえ。
- I：本気で読みよった。ほやけど、学者いうても賢そうに見えてどういうこと？
- T：わからんねえ。
- I：ふだんちゃらんぼらんなんね。
- T：ふだんでも、ほげつだったて本読んどるねえ。
- I：ほう、どないな本読むんよ？
- T：自分の思ったとおりの本やないん？

- I：ばあちゃんが見たことないような本か？
T：いやばあちゃん、でも見たことあるよ。
I：どないな本？
T：だけど…ばあちゃんみたかわからんねえ。
I：わからんね。じいちゃんの勉強しとった本、わし東京に持って帰っとんのあるんじゃ。
何冊か。辞書とか数学の本とか。
T：うん。
I：ああいうのはもう、試験受ける時の本かいね？どうなんだろう？
T：あんなんはね…試験受ける時の本じゃね。
I：ああ、ほう。で、じいちゃんやかその法律の勉強するのに講義録とか使ったりしよったん？
T：うん。
I：早稲田の？
T：それは一部だけやね。
I：一部いうのは？
T：もうその…それ没頭したら、それだけんね。
I：早稲田の講義録もとりよったけど、ほかのもいっぱいやりよったということ？
T：うんそうだろ。
I：ああ、ほんだら法律の勉強するっていっても早稲田のもとりよったけど、ほかのことも勉強しよったんじゃね？
T：うん。
I：この辺いうたらもう学校無いけん、ほななんじゃないと勉強できひん、よそからね。あの…とってやらんと。
T：うん。(後略)

実は、この方の夫にあたる方も早稲田の講義録を使って学習をしていたそうである。その方は、結婚した後、太平洋戦争において戦死されており、残念ながらこちらの方についても当時の状況を追って調べる、ということができない。旦那さんの方は講義録で課題を提出するような学習ではなく、参考書の一部として用いていたようであり、このような多彩な利用法というのも講義録の柔軟さ、といって良いのではないだろうか。インタビューに応じてくださったTさんは、お二人とも講義録を学んでいたことがお二人を結びつけたと思っているわけではないようで、旦那さんの方からも証言は得られないので、それについては判然とはしない。けれども、二人が持つ向学心というものは間違いなく存在していたのであろう。Tさんは講義録などでの学習の後、教壇に立つ仕事などをしていた、ということで、それが決定的であったと言えるかどうかは定かではないが、何年にもわたる地道な講義録での学習ということも、その後のキャリア・人生に少なからず影響を与えたものと思われる。

2) 勤労学生のよる学び

次のインタビューに応じてくださった方は、講義録での学習をされていたわけではないが、高等小学校卒業の後、東京の出版社へ「少年社員」という肩書きで勤務しながら夜学という、これもまた「フルタイム」・「メインストリーム」とは違った学びを経験された方であり、様々な角度から、働きながら学ぶ様子というものを知るということに大きな一助となるものと考えます。また、講義録を用いて学習をしていたわけではないけれども、当時講義録を見かけた様子について語っていただいたのでそちらについてもあわせてここに取り上げ、分析を試みたい。

I' : インタビュアー、 K : 東京都在住、男性、1917年生まれ。

2013年8月13日東京都にて収録。

I : 「少年社員」の頃の様子ですね、勉強の……だいたいどんな時間のタイミングで……仕事終わってからですね？

K : うん。あのね、だいたいね、5時に終わるんですよ、会社って。でね、学校はね、大学のほうも同じだけど²¹、だいたい5時半から6時で始まるんですよ。今はね……昔は夜学生っていったんだけど、今はなんだっけ？

I : 2部とか、定時制ですか？

K : 昔は夜学生っていったんですよ。だからそれも非常に多かったですよ。「どこに勤めてるの？」っていうと、だいたい保険会社とかなんか。

I : あそこ²²は職場が多いところですね。

話を伺った方は96歳と非常に高齢であり、決して多くのことを聞くことはできなかったが、共に学ぶ学生たちとの情報交換等言うなれば横の繋がりを、多分に意識して学校で学んでいた様子が窺えるようである。

K : 僕が記憶があるのはね……小学校の頃だから、どっから手に入れたのか思い出せないんだけど、それは講義録のね、内容見本なんですよ。

I : ええ。

K : 内容見本ってあるでしょ？

I : あります。

K : それがね、なんかね、昔ドリルみたいな……

(内容見本を見せる)

K : それだと思うんですよ。で、細かくあれしていて……その記憶があるんですよ。取り忘れたんじゃないんですよ。誰かにね、こういうのがあるよっていわれた記憶がある。だから、それはドリルみたいな商品、とにかく厚表紙なの。ペーパーバックみたいな。

I : そうです。自分で学んだやつを綴じていって……一つの本にするっていう……

K : そうそう、どうもそんなあれだったと記憶があるな。それですよ。でもなんか赤っぽ

かったような…この色……

I：これはコピーなので。

K：なんか赤いイメージがあるなあ。明るいイメージが。で、タイトルが『何々講義録』って左からかな、あっそうだ。

(内容見本のコピーを見ながら)

K：ああ、こういうイメージがある。三段か四段の。

I：こまかく、びっちりと書いてある感じで。

K：そうそう。それはだいぶ読んで思うんだよね。部数なんか知らない？

I：細かな数字は分からないんですが、受講生はほかの所でもたとえば中大とか出してたんですけど、中でも突出して万単位で、受講生が。そのぐらい……だから雑誌の広告とかも出してたし、新聞広告とかも出してたらしいんですね。なので、目にする機会というのは多かったみたいで……だから全国津々浦々に早稲田の学校の名前を認知している人が多かったっていうのは一つにはやっぱり大きかったっていうのはあるみたいなんですね。

『内容見本』を小学校で見かけたということなので、この見本は中学レベルの講義録『内容見本』であったと推察するが、広告媒体での周知ということもさることながら、実際の現物を目にする機会があったように思われる。K氏自身は用いてはいなかったけれども、それだけ当時の子どもたちにとって非常になじみのある存在であったということができるとはのではないだろうか。

まとめ

勤労学生として学ぶ人たち、今回は主として講義録という媒体を用いて学ぶ人たちの姿について分析を試みた。今回のインタビュー等によって改めて早稲田大学講義録の普及の大きさについて確認をすることができたように思われる。

そして、多くの学習者たちに共通するのは他の学習者との繋がり、というものを特に重視していたといえるのではないだろうか。特に講義録という学習形態をとっている場合、「独学」なのだから当然ではあるのだが、とかく一人一人個人の作業となることが多くなる。やはり一人きりでの学習というのは大変心細いことになるのだろう。これで正しいのか、など周囲の者から確認をとることができないために不安に駆られるのは想像に難くない。そこで学習しているのは自分だけではないのだと再確認できるという意味でも、盛んに読者欄などでの互いの意見のやりとりなどが行われていたのではないだろうか。繋がりを希求することについては、インタビューをさせていただいたお二方についても共通するように思われる。

今後の課題としては、講義録によって繋がりを持った人たちが、各地域において実際にどのような活動をし、学習者のコミュニティを形成していったのか、ということについての実態調査など、更に調査を進めていきたいと考える。

- 1 これは当時あった普及舎の『通信講学会』（山縣悌三郎立案のもと、1885（明治18）年12月5日付『教育時論』第23号紙上に「通信講学会興る」と題してその「趣意書」および「規則」の前文が掲載され、この事業の開始を大きく報じている）をヒントにして発足したもの。この「通信講学会」には高田も依頼を受けている。「私は何でもミルの『代議政体論』の翻訳と、『貨幣論』か何かを載せたのであつた（高田早苗述 薄田定敬編『半峯昔ばなし』1927年、192ページ）。」だが、比較的幅広い学問分野をカバーしつつ、基本的に理学思想、理学教育の発達への貢献という理念に貫かれていた通信講学会に対し、政学講義会は国会の開設や官吏の登用試験などを視野に入れた『政学研究』が中心であった。
- 2 高田早苗述 薄田定敬編『半峯昔ばなし』 早稲田大学出版部 1927年、193頁。
- 3 高田早苗「大学教育の普及に就て」『早稲田学報』175号 1909年9月、2頁。
- 4 高田早苗「大学普及の要因」『早稲田学報』185号 1910年7月、2－3頁。
- 5 第七条 校外生ニシテ其卒業証書ヲ受ケント欲スルモノハ試験ノ上之レヲ与フ可シ。
 第八条 校外生タラント欲スルモノハ入学金五拾銭ヲ納ム可シ。
 第九条 校外生ハ毎月講義録印刷ノ月費トシテ壱学部三拾六銭ヲ納ム可シ。
 但府外ハ郵税金五銭ヲ要ス。
 「資料21 講義録受持講師および科目記事」早稲田大学大学史編集所編『東京専門学校校則・学科配当資料』早稲田大学出版部 1978年、105頁。
- 6 1888年7月より館外生、館内生から館外員、館内員へと呼称が改められている。
- 7 『教育時論』223号 開発社 1891年6月25日 9頁。
- 8 同前。
- 9 『高等国民教育』第8号 早稲田大学出版部 1908年7月27日発行、25頁。
- 10 同前、26頁。
- 11 同前。
- 12 『高等国民教育』第17号 早稲田大学出版部 1908年12月12日発行、27頁。
- 13 『高等国民教育』第20号 早稲田大学出版部 1909年1月27日発行、21頁。
- 14 『早稲田高等女学講義内容見本』 早稲田大学出版部 1932年4月より1933年9月まで、26頁。
- 15 同前。
- 16 同前。
- 17 『女学の友』 早稲田大学出版部 1927年7月15日発行、60頁。
- 18 同前、61頁。
- 19 『早稲田』6月号 1932年、30頁。
- 20 同前、31－32頁。
- 21 中央大学の付属から大学に至るまで夜間部に通学していたということである。
- 22 当時、中央大学は御茶ノ水にあり、一ツ橋にあった職場から通っており、当時から周囲はオフィス街であった。